

松下君を憶ふ

松尾捨治郎

◇ ◇ ◇

自分は長く地方に居つたので、君と親しく相交つたのは昭和二年以後のことであつた。其の後昭和三年君が病の床に臥すまで、四年間、短い歲月ではあつたが、國語學に關してのみならず、種々の方面に、手を携へ事を共にしたことが、割合に多かつた。友人中で川崎の陋屋を來訪された度數の最も多いのは、實に君である。

來訪の度毎に、話題は何時の間にか、國語に關する事となり、午後二三時頃から、夜十一時十二時頃になることは、珍しくなかつた。大抵は議論が私の受身となることが多く、其が自然と家内の者に感じて行くので、君の歸つたあとで、家内などが、

「あなたも大抵の人にはよく理窟をいふやうですが、松下さんには何時も受身のやうですね」

と笑はれることも少くなかつた。又來訪の度毎に、例の喫煙といふよりは、寧ろ卷煙草の端に一寸火をつけて、直に之を火鉢の中につゝ込む。其が毎回七八十本から百本位になるのが、普通であつた。私の家では煙草を喫む者がないので、之を非常に勿體ながつて、新聞紙などに拾ひ集めて、芥箱の側などに置いて、ルンペンの持ち去るに任せたことが多い。

「君そんなに煙草を喫むのは、健康によくないだらう。」

「いや僕は喫むんぢやなくて、唯手にして居るやうな者だから害にはならない。」

「それぢや勿體ないぢやないか。」

「いやつまらない遊蕩などに、金を費ふ奴さへあるのだから、是位の道樂は。」

といふやうな會話の交されたことも、一二回ではない。

◇ ◇ ◇

時々電車なくなる頃まで、平氣で居られることもあるので、熱意の間から遠慮なく、

「もう十一時半だからやがて電車がなくなるよ。一體君は時間を超越して居るね。」

といふたことがある。さうすると君は如何にも心外なといふ面持、昂然とした態度で、

「苟も道を説く者は、時間などに捉はれてはならない。所謂教へて倦まずの覺悟が必要である。目連が辻説法をした時には、時間など考へなかつたぢやないか。」といはれた。

かういふ風であつたからこそ、昭和二年頃から五年までの短時日の間に標準日本文法を改訂し、標準口語文法

を大成し、傍ら標準中學讀本編纂の中心ともなられて、其の精力の絶倫なるに、人を驚かしたのである。昭和五年頃徹夜の習慣が不眠病を誘發し、血壓亢進・腦溢血に進んだのも、思へば無理をされた爲で惜むに餘りある。

昭和五年に、私が服部前學長の懇命により、學生課創設の事を御引受した時、矢張血壓亢進の兆あるのを發見したが、松下君の勸誘により、倉上博士の治療を受けることになった。其の當時君は私に頻りに病院通ひを勧めながら、自身は餘り通はれなかつたのも、今にして考へれば、一大恨事である。

五年二月の事であつたと記憶するが、輕症を發して暫く休まれた。あの折友人人口を揃へて嚴重に靜養を強ひたならば、或は輕快に赴いたかも知れないが、君は暫く休講されただけで、やがて後出勤され、五月末に再發遂に床を離れ給ふことが出来なかつたのも、今更歸らぬ惡癖である。



「僕が今まで讀んだ書物の中で、最も感心し最も嬉しく感じたのは、弓張月と山田孝雄氏の日本文法論とアインシュタインの相對性原理と〇〇とである。」
と言はれたことがある。アインシュタインを愛讀され

たのは、何人も意外に感じられるであらう。君は單に國語學に造詣深いばかりではなく、嘗ては飛行機の製作に愛身をやつし、太陽熱の利用に工夫を凝らされたといふことを、横山健堂氏から聞いたことがある。そこで直接之を君に質したところ、「それは少々間違つて居る」とは言はれたが、全然否定はされなかつた。何かタイプライターに關する特許を得て居るといふことは、直接君から聞いたことがあるけれども、詳しいことは承知しない。ともかくその俊敏明確な頭腦が、こんな方面にも働いたことは事實である。其について君は

「こんな寄道をして居つた爲に、國語學の研究を、約十年程捨て、置いたのは、今考へると、惜しいことである。」

と述懐されたことがある。さて君の國語學上の卓見は、品詞論を初めとして、非常に多いことは今茲に紹介するまでもない事である。其の大特徴ともいふべきは、飽くまで徹底的であつて、折衷・便宜・などといふことを、拒斥する點にある。此の點、私が舊説を成るべく生かさうとするのと大變違ふ所であつて、

「君の説は非常によい方向を取つて居るが、どうも徹底を缺いて居る。今少し話しあつたら、僕の説を正

解してくれることが出来ると思ふ。」

といつて、私の態度を齒がゆがられたことが一再ではない。昭和四年頃君や高橋、堀江、折口、御巫、今泉諸教授に私も加はつて、文法座談會を開いたことがあつた。

其の際山高み、野を懷しみ、などについて、一夜晩くまで論じあつた。最後に少々根氣負けの形で、私が

「此のをが目的のをであること、下の高み、懷しみ、が他動的の者であることは、大體諸君の意見が一致して居るから、此の邊で妥協しようではないか。」

といつたが、君は例の如く承知せず、改めて本誌上で相見えることになり、先に發表した私の意見を駁して

「高み、懷しみ、は他動的ではなく、形容詞の他動態である。」

といふことを細論された。かういふ風で、こちらが免をぬいても、容易に戈を納めないで、あくまで論を闘はし眞を探らうとするのが、君の長所であつたから、之に閉口する人も少くない。それで私は

「大變失敬なことをいふやうだが、君の議論は議論の爲の議論だといふやうに評する人もあるよ。」

といつた所が、君は

「いや此の人は取るに足らんと思つた人には議論はし

かけないよ。何か得る所があると思ふ人とだけ、やるのだからさう簡單には片付けられないんだ。」といふので「閉口させられるのも、一種の光榮だね」と笑つたこともある。

老いての後は、新に友を得ることは、少い。職業の友お義理の友、利害の友、は得られるであらうが、心からの友は得がたい。此の意味に於て老後の心友であつた君と幽明其の界を異にしたことは實に堪へ難い悲を感じる。